

英一蝶 四季絵跋

夫大和絵は、そのかみ土佐刑部大輔光信がすさみに、堂上のうや／＼しきより田家のふつ／＼かなるさま、岩木のたゞずまひ、やり水のめいぼく、これにはじまりて末／＼にながれ、予が如きのつたなきまでこれをもとゝす。

近頃越前の産、岩佐の某となんいふもの、歌舞白拍子の時勢粧をおのづから写し得て、世人うき世又平とあだ名す。久く世に翫ぶに、また房州の菱川師宣といふもの、江府に出て梓におこし、こぞつて風流の目をよろこばしむ。

此道予が学ぶ所にあらずといへども、若かりし時、あだしあだ波のよるべにまよひ、時雨朝帰りのまばゆきをいとほざるころほひ、岩佐、菱川が上にたゞん事をおもひて、はしなきつき名のねざしのこりて、はづかしのもりのしげきことくさともなれり。

さるが中にあたりて謫居さすらへし事十とせにあまり、廿とせに近きを、ありがたき御恵のめでたきもとの都にかへり来る。

あるひとむかしの筆の四時のたわぶれ絵をふたゞび予に見す。其頃は心たくましく眼すゞるに、髪筋を干すぢにわくる事くさもことたらざりけらし。しかし今の世のありさまにくらぶれば、髪のととゑりをこへず、ふり袖大路をすらず、たゞあまざかる田舎おつなの絵姿とも思ふべからん。蛍星うつりかわりてこの一巻を見る事、浦嶋が七世のむま子に逢へるためしにひきて、かつはよろこびをそふるの心にす。これがために跋書。 英一蝶

大田南畝編『浮世絵考証』(『大田南畝全集』十八卷)